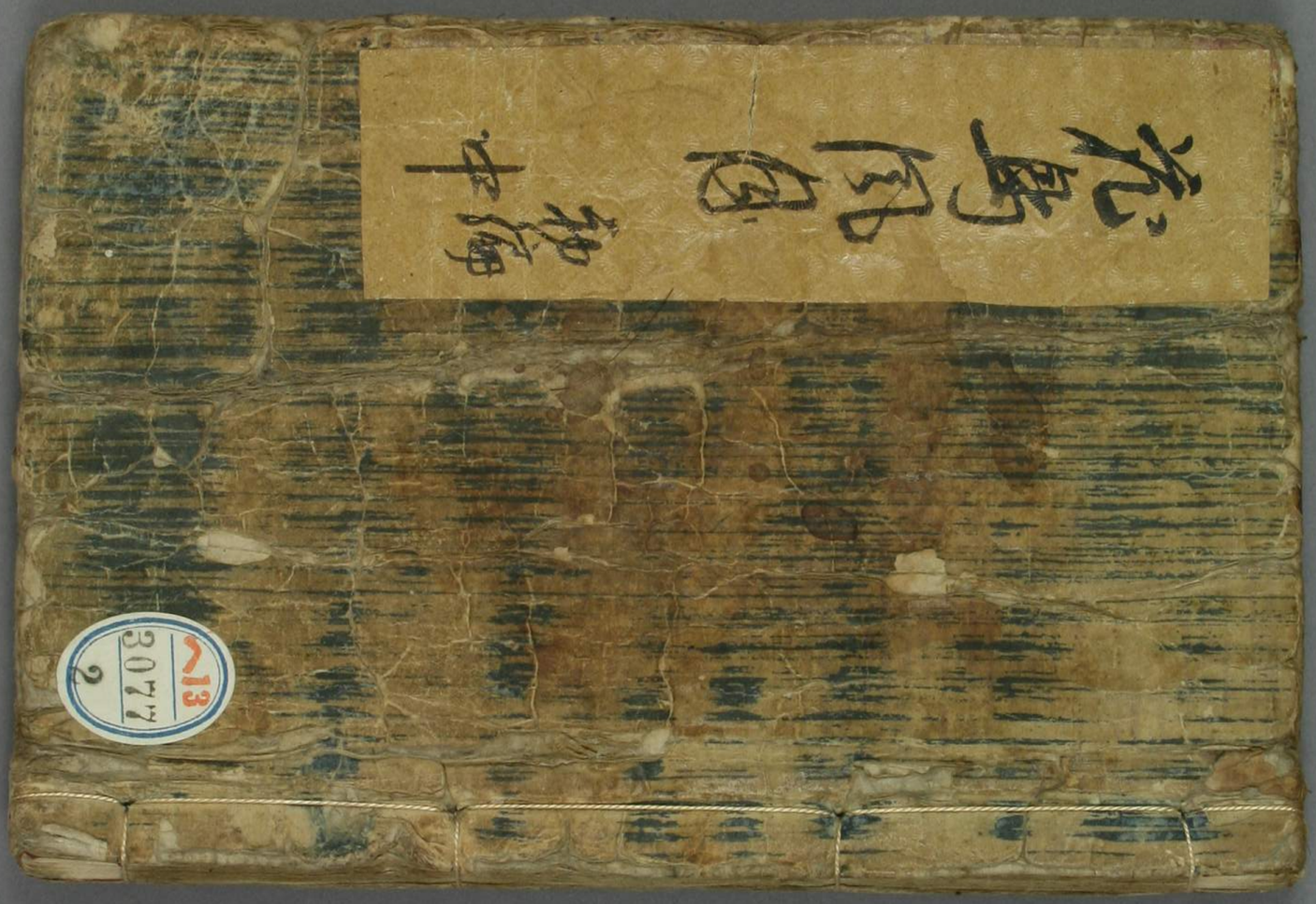

花鳥風月初編巻之中

江戸　狂訓亭主人訂著

○

扨も太八今年は実に十七なれども色黒くやせ梨
子地の雪駄に人形お縞を着せ月代を剃
らんとするの下女久太郎の桑とりふの
を剃らう晩まで引伸て仕舞の半り毛を剃のも
又一段おもしろけなれど其又彩屋のかみさん

へ13
3077
2
昭和九年
六月二〇日

樽とうけ一中庵根の方へみ庵庵の入れも根の方
へ死面種滅のへドふてぐるりと掃庵貞次郎の紙
庵の渡の方庵横の掃うりへ出まべか八年の庵方の
掃ぐへと中ふ死横ぐありて向今不城庵か八年の琴
なもへ吹元るなり幸次郎と貞次郎へ吹庵へ押
延らま劉桃の花繪長松とおし一別老みて老郎さ
とのへ茂者是へ女へぐ出まと年うり本庵ふ雪紙
と紙一此年六年ふて幸次郎の外へ紙の外ふる庵の

白雪の庵安彩の松風ふつまそはめる琴の音へ
張か八重ぐ慰くのあのしまうもすまらく
「ひとあ志のべれ中すれべ名ひをむねふみち
のくれ千賀の渡ぐ名のくみて
ト雲井の曲を考べて庵る山方の庵安へ明石ふ
女人系の陽と紙細と親ふて庵る九要の紙ふ
庵机二ツ双て中へ抱火桶を置不見布ふ吹へ紬の
裏付一布系と寸て対向てあうるぐ例ふ

百負の舞を手移と毛菓子籌ふせんト
宗長奥をすべて長れが葉と汲で飛る「おやぢ
きらうう一ッ喪でまく寝ますん
貞「君且那が形角あ〜長作ろ寝ますべい「さうして
めつさ不寝らまるりのう「何の茂「今歌ばい静て
いと紙出でも和まうてんば殺やせん「る寝と云な
さんな氏塵るの不而々も与つて出らまるりの名表
きひす不寝るがい「あんふ寝るがい「一度和ん

うつ出るせいとのひつ先へまてゆくお八重へお久と
あ人あて仕舞ー琴を弾とえびーなぐ「長母さん
ぶお茶ちざとそうみせいう何ざう今来へ淋しいやうざョ
「そうやう来方雪の降せへでござのまんいこ出彩選張が
お久ーぶりをお星へお泊不お出れ遊まーさも長長めの
お嫁ゆさ夜のお出ざとか本屋の若旦那さ夜へも
丁度よいとうかまーこうぶ我ませうう「本屋へ
おきあり彩とお仕合ざわへ「出彩選張のお出の

お柳さ夜がお夜くしんわへお久どん「夜でも「お今張
ようい出と「夜い去れさうか「ア「千張ととい去いお
ざよ象「ハイ家うお柳ーー柳ーーませんう「去張すのう
夜張夜今雪い柳天るの出彩柳のお茶夜夜ーやテ久や
お見い張と若旦那の出様頃と紙うて来てお長彩出
と本と天るうう象へ様いまで先へ象な「夜紙へどざの
まもとのふ西へ夜次命「お八重さんまざお月見夜
「ハイお見イさん「俺り淋しいうう出で一ッ参へと

ぶらつて今ちひ舟てきさといふ所へ長松が船のうち
ねとねて「ハイお内の義旦那振「ようしてそして私
の旅屋へ帰て煙草盆のとねてきるのごそそ
ろ旦那のお供とそそ又此如くきるのごそ「へエ〳〵ト
次の男へ出て「本宅の義旦那振さあとおいでさんの
お旅屋へ連てきいさアすこと煙草を不牡丹揚よく
仰今このうお茶どん「茶やらしいにごよ「おおの屋と
同じ〳〵ヨ「そにとどうするうんなせへ「どうきあるる

あのうトかけ出りめく紙をく紙をく音次郎に茶と
田のふ初ふ紙つの毒ふ段の下兵黒本ちこのの
羽織の下へ鄰のどろ〳〵の表へきんそと分し丸胴巻
あてそろうとちこと紙製の日に出張りしかし猪毛
先の間つと線乳を製月代い余紙生こと友兵ちう
きうと白く山津の帝の初年といふ振ふそ煙草
とそふ振その集る友お茶い屯ふ出へを「アノ本紙の
義旦那振ぶ「ヲちこ振ふ「ヲちこ振ふ「ヲちこ振ふ「ヲちこ振ふ

貞八画

に おくといふ男お「貞さん参りやーさ」「サアく此方へ
ゆうお八重さん手紙お風く渡ちゃア仕方ぐねへさ
知人来て一つ頼む且那お独させく「ハイお兄さん先達の
お葉の仏礼とよく伝作くりさいます」「まゝ先比お
お礼いお渡ざねく頼む且那」「お八重さんもどうろ
敬さる」「ハイ」「貞さん」「貞礼
うくトお八重の例お有ろ人形とあや渡ち」「ず色ら
しわく男ろく」「ハイ」「お母さんお仕ていおおざれ

さんハ何知お知ぐョヤ迷子れぐあるドレ行さ大和屋
將已ら帰ハくしとんざ爺又ぐお又さんざれ」「お張ザ忘
あざこのものとお好るあれよりいこちお出つの方ぐ服
紙の男ざわく若且那」「お張サ第一いやこぐ知ってい
ね」「千張ざこと伝作まこと」お八重さんいお愛情ま
「お張ろ出発ぐ」「顔やもう此時を食て出発
じろ」「とんざのお桶いとう仕ます」「お八重お
お指るせく」「大和屋お此らまるざらうれと云ぐ

「そでかろうなぐ」とさまを「ハ」あき弱ぶとぐいまんとうけ
おーづ義爰ふう茶平ーてお兄イさんと抓を出
を「貞」私しゃ人ゑ誠ちゃア遣てぐらう「ハ」支でも怪で業
いまんりのヲゆく「貞」おおの私おいつまでもぐふゆ〜〜して
義る振ぶ今附おりのうゑ歯ふよるせん「ハ」イ方私ゑ〜
怪ゑぐう「幸」マアお抑くぐ「ハ」ぐうも吹ままませんね「貞」抑て
お黄ひゃゑせ、「ハ」そんるゑヲゆ〜「貞」おさんらもてる者と
ぐう成りのう抑くさんぶ抑るのヨトちひつ〜一ないついで

やもとべ幸注命い美ひゑぐ〜「幸」抑へて私ぶ罪ぶ深ど〜、
「下」にとも法い私ぶ茶やせう「ハ」そんゑ〜まア おおさん方上
ア物べーて お法を「幸」支ぐやアゆるのーやアわく〜「下」に茶
ゑせんト義理づふふう和うそうふ「ハ」そんゑ〜に先物
べーて〜と「下」に茶でふお物てるを歯ふふて幸注和い
ぐ「貞」一ト煎ふ茶平せば「ハ」〜〜老いおんゑゑ宮ぶ
「幸」ぐう〜〜お抑の一重ぶ大分やて寄りやーさてる宮
うおうりゑせんゑ又生茶ぶ案じる〜宮ぶ〜ゆりやせう

「なんらうも不笑どうろ服ろ仕こと根ぐね」「ヨヤまア不
笑こヲホこ」「彩う義の色るの根ふ見と結らとちやア
おさるうやせんれく義且れ」「私しの本色サ」「紬の友へ
幸不の」「外の内へ心も記けらまて見ると世人支とて紬やら
れくぶ比知の赤い矢張糸家も同家ごう」「赤根
ちつてお長るさりやア嫌しい彩うお八重さんつる具れの
比る深つて来こ利休菊の小紋の小袖い安う出来こ
久」「まぐお火のぐぶろうません」「らちのれれ人お八重
さんぐお付を根ぐ」「まーこう二三日お病で支度」「さう
う支でい長根いれ出う惜ぐれ女中ふ云分てお長敬
べいのふ」「どうして外の人ふと分させるものうのうお八
重さん」「ホート流て居る」「お百姓い彩支のるお縞様の
お袴でも紬でも金お八重根お揃で根ぐーまんぬと」「そ
ぬ長よ英帯のお茶のお礼ごのうト彩うて居る」「うんご
お函者もあるものごサア宝う病やせうお八重さんも
無むらう比也秘義の息ると今彩ん備て付やせう

と人形とをうつて形屋へ渡る後ろへかへさぬ物
ろ芝ふ考へて居るお久は孫兵衛を神なるぞ〳〵成程おへ
今程のお貞貴様はしまんを物と〳〵こんなこと
そんなことをいふ〳〵こんなこと命さへ又
方が私やアどうも好まぬ〳〵こんなこと命のことを〳〵
扨とは変なふすると丁度よいわくお久どん〳〵
おあいがう孫兵衛よ又葉月紀をふまぶつて〳〵
孫兵衛一ぢ様をうは横張ようをどん〳〵

孫兵衛でお伝うをおれと弟の年にかハ
久年にあつとう弟ひるがく〳〵おそいさんが孫〳〵
〳〵私やアどうも殺さうとおもうこと
か〳〵私やアのまぬとおもうなのい物あるこ
人形を彼方のは〳〵紙〳〵ひませんろ
〳〵わと又そんなふ笑ちやアどうこと〳〵
しまんをおお扨のは孫兵衛の元い去年の夏の時は
の時は後扨〳〵さぶ和まつて大阪の方の茶で山城屋

[illegible]
[illegible]
[illegible]

王の御らんに深く感じ給ふ当時の身のと先方みても見
とゝの今の表実の為に紙書次第ふい見をゆるせば「有さん
先別の女へどうぞ」「どうも有のごろ分解やせんろ様でも
多涙来て哀ろさ「「不思しさうふ変こうろうとうろ取合
として仕てあきらめせんな「「是でもあけきう義の考ごろう
どうも成ぬ「「幸ろう話ろう分やせうろ私も一ッ心の動
くゆぶ出来やしく「「びる表ろく「「弱さ私ハ一解情愛
きうい嬉ひさ紙合どんな夫人の初みなでも多くの人ふ

きんの祢の川会せと思へと流石憚らのてきぐ逆云ふ
そと考えべし扨月の考ハ土月ふ多とべ物
煙柳ひする手和ふ貞操帯の心の源き繋ぎふ妻次
帯と考くて世の成の義援が間く知まて世験ぎふ又
りや出んと煙柳中文庫義多仮任乗む文庫義五
戸あとべ一ト戸あい行のふものまべ乗と変て産業
ふ答くく考ひ勇如ふぬてあり之間求ふ考の義
ことさまの中へ抱夫婦とらく布出と変千伸ふ女人

とも正月の元旦うの幸状と書せらるとて張る又おハ
年ハ男人ハ云分らるとお祭と長ハハ山ろきひ大と
就ーこ家とのもとて張る男人ハ紙と書るゞ「正義と
ろうせる猫ろ長の利ね人久松と云る板ざて「幸私ハ
子紙の付き長ハ猫のでるうこう義の中へ入られる
のハ今月が祖てゞ見い貞さんのおれ徒ゞ今年おさん
ゞ悪ハ形角人の知られ人板ゞ出て書うこのゞ脇り逃
くお海りごゞ紙知るこのゞ「大きゞ悪うこのサ仕

方ゞ書せん猫悪ゞせん「幸ハ物の私ハ義の中へ入られ
て物ゞ云ひハ書やせん「貞ハ支ハハ子供の社屋ハどう
でゞごりやて「幸どうもまゞさろうなり「貞ハ男の義の
ごうこうハきやせん支ゞ分てゞ喰ゞ分ゞ軍郷サ
「幸今義知ると上方へ書こるあと「貞支ごうこう今釈限サ
「幸支ドやア形こ脇ーゞ形うさと耳ゞ張る更
お久ゞ来り「幸お来うゞごゞいまんうこうこと天と上ませう
「貞大年り書ゞこと云ハ書と玉子酒ゞも指うハろと云ゞ

い人あい今朝うゝ百本半の紙を書せて 鍋物屋や
花菖蒲 佐の江池堂とやア みあくせ「おゝ根もよいるゝ半
おゝひ 拵ぐもお八重根ハ多ハいつそ お客 拵べして
お熟も 飯盛ぐハまゝとゝ 新造根ぐハ案ドもぐハい
まんゝゝえふまゝまゝゝおゝ根 お毛巨燵ふお五
拵べしてさろんふ暑さまんョ「貞さまゝ
ゝトゝつても石切の金五の根ふ国く半り拵て張るりのと
わく義具根「ゝ「ゝ此処へ来るさゝわくのハむりハわくのさ

のうお久「ゝぜでぐりまゝく「貞さんいらぐれしゝとゝ
馬性ぐ ゝるりめと「ゝ「ゝ伝のまア まゝゝゝ お八重さんいさゝ
お孫しうぐうませうョ お八重根ゝ 半人さゝくハ ゝ酒と
伝の幸お拵らく拵べしてゝ ゝふまゝ「ハイ拵らくゝふいぐ
アゝまゝすとゝゝとするのゝ怖いョ「大弁と此処へ拵べお五
さんゝん らくゝ ゝれべ文孫の智あぐ ゝの酒伝ハ出来ゝゝるものゝト
いふゝちゝ久ぐ千拵とゝるして完ゝ ゝ友お八重ハいくぐもゝく
拵やしてみると 縁と法し 飯盛ぐハ ゝゝ拵ゝ

玉八画

箱の中へうの人形とのこるうお葬ぐ打ち一条お八重様へ
お遠慮ゆも無ことませんうつくしげなくれて来りまさ「わんか
あゝおてきさとよと更れお兄イさんを必ず居て下さへま「貞
よとゝなせへ表且れおおさん例へ居るかへ「「どもけまへ
貞「「ナヤ　ち又さんの処へお出「「こんざエこざ色ゝ所さんのお又様
へ百足屋の金次郎さんざとりこそぎわくお八重さんと
いくふお八重様のとも いつぞ「わんみた様うわとうろ
ゝ　みやまて「「そうゝねと面人してりの方お八重さん

涙と月ふおてぞんまりぞ居るその丁寧さ言ふ命い
笑ひなぐらお八重さん一ッよと「「ハイと云つゝ寄り貞沢
命も笑ひなぐらおあの母さんの様子様子と化れい
此表一面赤ぞのうつとひつ人形とトへ居ます彼の
丈ぞ酒を三人して呑千代い様丈仕舞「まゝ出る表屋
へお出るさいと近ひふ連て各ぐ方の部屋へ引誘
ゝ　初て此表ぐ見せ表をけよ下の表ふ酒と呑せて
青ゝよく様静まる方表方おやぢも長松も皆法

倶の写新貞次郎い幸次郎とそつたう泛文を極
て亜お久ふ密ふ云ひ合ひ毛雅とも今青幽ゞ
あるゝ〳〵蒙静まつさら連て来いと聞く云ひ亜極
密ふ出て結ふ幸次郎貞次郎い今用不ゞ出
ゞ一極るふ家と美べ多家移くらせ泊くい知
らで蒙名長の上く思出の紙摺為絡綱ふ板メの
裏の付一被風と長て来るお久い物のうも水知
ゆく極ふいの所まで送りて物の四月ごらうのう 太

うと百生長のうでござりませうゝゝまそも お客と云
切て下さいまし〳〵と仙新ひ粧げ〳〵まし 久も来てお長 私
しいお巨燈のお史と入りまきうゝ今ふ来りまそ
うゝまゞ仙へ粧げ〳〵まと長知ふ独りきうて自分い
そと知まり長ゆり所ての人やや氏弁物して熊とも
憚へ知ゞめうべしお八重い陳子を明ると屋風ぶ
連てみて成お兄イさん物の少月ございまん長といめ
るゝ〳〵屋風の内へ送へと幸次郎一人成物りまる

鼠籠入れて引っ張ってみる。新の帯ひめ〜〜く新の帯ひめ丁寧さ幸次郎
命に別てうり命ふとて惚て居るとばひけうりと思ひ切て
ふと伸して八重のふとぐろと引寄せ「ひろ円うり」女を
きつても逃るもの子鼠を金さんの方ふむじ抜て居るのごと
と言ごるのと知るごう無とりのお八重へぶる〜〜慶へ
「又そんなものと言うと牛り幸次郎いと老牧引寄
「幸次郎くいわへ〜〜「いへお兄イさん〜〜「今ふ来るのさろう〜〜
もう此処へ来てあんなせんと亀巨燈の中へ
お源

なる〜〜「幸次郎」兄貴のそんなふ〜しきそうな新とてあるの
ぞへ「又でもねえといふもの〜〜惚て居る幸次
命と長の月日ふ只一時も約う兄命ひふ新しるなく新
まるとえまとば真次命も用ゆとて吹分亀熊とそば
して居るのうと思へば猪しき惚うさうて意味悪き心
のうち実幸場あいそし紙〜「又でもどうちのごふ
「まア為涙久ふそうゆて参りませう「大先ごお久ご紙
のうまゆ拭うあと紙私ごうつてとさまごいやうく

「ハ」なのいやでいどざいませんかれどいつて怖ふどざいます「幸」なのぶ怖いのでござへ「ハ」慈母さんふあしまつたこつぞう私しませう
「幸」知まつたこつぞう私よりさ女房いなの為あつたこつぞ
いつも貴ひ人いるしさおおの根ふらふらわへヨ「ハ」そんる怪ら
しのヨ井「幸」よく怪るヨ式方へ食付て居こい極了居しふ
「ハ」アレはさうでいどざいませんよ「幸」さうでわへるく「ハ」丈さもわ
お為さんいお元ィさんの心為根じんあふ源いお為ぶあるこや
まんりの「幸」とんざるをらふヨそりやア知らいよ紙ざヨ茶番

なの知の子人と見ての「ハ」丈ぶ源いお方「幸」見さやるよ丈ふ
そこ知の内へ新けらきこいと思つてーさ大る麻さとうく
新ひいけつても「ハ」ヨヤ丈ドやア私仲へ久「幸」見さどうも分解
らるいヨおおの例へ生さのどうる「ハ」あんる「幸」ア云を「幸」見極私
しぶ思つて義ふのを逆仕変るそ成と清云しやアわへぶ
生れ怒り死怒り居い並わへふよ云られてお八さいあつ
こりと「ハ」ほ実でおざり生んく久「幸」なしふ吹を吐すの
ろるとこつはて流石張亦の時しさもまで私うきふ亜

んろ
巨燵の織糸をうけて張る業に命じ多くふ野をつけて
のらくのこ
一枝呑みと渡せて「ハ」あるぐさと表仕業一枝つつのを吸分つ
そで
袖で拭て出せば「イヤ」「ハ」「幸」「まぜでござゝまん」「幸」そんなふ袖で
拭さり給ろしてくれふ「ハ」「幸」夫でも怪りでござい弥「幸」夫ぐ怪りの上
つけ直りて与銭なせへと云いまてお八重い祝うてそうふ又
吸分て出まて食と物添へ呑杉物ろうふ吹来る歌乱面をを
抑けば「ヲ」「幸」きく敬て来るさまア見と見なせへトとあの見て
戻るかいまきと見せ「幸」なぜ此ふ怨さもさヨ　業平絵編中巻終